OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マラリアから考えた境界 : 当事者とよそ者
Author(s)	小川, 未空
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 435-438
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68233
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

マラリアから考えた境界
当事者とよそ者

小川 未空
大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程

ケニア共和国の西部には、アフリカ最大の湖、ヴィクトリア湖がある。湖の近辺には、マラリアという感染症を媒介するハマダラ蚊が多数生息している。ケニアへの5度目の渡航を果たした2016年2月、私はマラリアを発症した。以下は、当時の様子を記録した日記に、適宜加筆したものである。

深夜2時、妙な寒気に襲われて目が覚めた。ケニアへ来て2週間が経ち、時差ボケもないはずだ。手がしびれるような感じがして、寝ようとしても一向に眠れない。水を飲んでみると途端に吐き気に襲われ、一気に嘔吐する。その後も寝つけず、3回ほど嘔吐を続けた。もう胃のなかに何もない。喉の奥が真っ赤になったような感覚を得る。これまで経験したことのない喉の痛みに不安を抱いた。早朝、いつもお世話になっているお母さんに助けを求めた。いつ吐くか分からない恐怖と共に、村から30分程離れた中心街の病院へ連れてってもらう。身体がひどく重い。お母さんは私を心配してくれながらも、知り合いを見つけては立ち話に花を咲かせるので、病院が遠い。血液検査でマラリアが確定し、薬をもらう。服用前に何か食べなければならない。だけど、全く食欲がわかない。嘔吐が怖いので、むしろ食べたくない。でも食べないと薬が飲めない。バナナの1本を食べ終わるのが、とにかく長い道のりだった。苦しくて、それ

でも食べ終わることのできなかったバナナ。朝から病院へ行き、夕方まで点滴を受けながら眠った。お母さんは、ずっと横にいてくれた。知らない人がお見舞いに来ては、お母さんの話し相手になっていた。帰宅してからは、マンゴーを半分食べることが出来た。チャイ[1]を半分飲み、眠る。夜、お母さんが焼き飯を作ってきてくれるけど、見るのも嫌だ。熱が上がっていることを感じながら、汗だくで眠った。翌朝、チャイをほとんど飲み、チャパティ[2]も半分食べることができた。薬を飲む。昼に再び食欲を失い、何も食べられなくなった。夕方にようやく、バナナを一本食べた。また薬を飲む。熱が上がったような気がする。眠りたい。でも寝つけない。

以上が、最も体調の悪かった最初の2日間の記録である。当時、正直に表現するならば、お母さんは、鬱陶しいほどであった。しんどいから寝ているのに、定期的に起こしに来て、身体の状態を説明させられた。こちらは英語を聞いたり話したりすることすら億劫なのに、スワヒリ語を好んで使用してくる。一言も聞き取れないほどに頭が回らなかった。食欲も全くなく、果物さえ喉を通らないのに、心の底から食べたくないウガリ[3]を用意してくれた。食事中は常に見張られ、食べることをやめて薬を飲もうとしたら、もう少し食べてから！と怒られる。そのようなことを何度も繰り返した。

しかし私はこのとき、同時に涙が出るくらいに嬉しかったのを覚えている。実際に、お母さんの前で「ありがとう」を言いながら泣いてしまった。普段、この言葉をいかに適当に使っているかが分かるほどだった。心からの感謝を相手に伝えるとき、言葉には言い表せない情動を伴っている。お母さんは、ウガリに文句を言う我儘な私に、毎日いろんな種類の果物を買ってきてきれた。眠ろうとして、眠れないとき、とてつもない不安に襲われた。それでも、お母さんがいてくれた。夫を亡くし家計の唯一の収入源であるお母さんが、仕事場に行くこともできず私に付き添ってくれたことで、どれだけ家族に迷惑をかけただろうか。

しかし、この件で、お母さんへの感謝と同時に、それでも彼らの生活世界に溶け込むことができない、外国人としての自分自身も痛感させられた。私はこれまで、不便さのなかでも、人びとと共に同じような生活をしていた。そうすることが大事だと思っていたし、そうすることで人びとに少しでも近づけると思っていたからである。「ミクはもうケニアの子（mwenyeji）だ」と言われると、それは嬉しかった。だけど、自分の体にかつてない異常を感じた日の朝、お母さんは私を、馴染みの公立病院ではなく、街の私立病院へ連れて行った。お母さんが初めて行った病院である。その後、お母さんは、私立病院の高額さにひどくショックを受けたと話し（病院内でも「高すぎる！交渉してくる！」と大騒ぎだった）、あんなところは大嫌いだとこぼしたが、それでも「田舎の公立病院は、悪いところもあるから。ミクは私立に行った方が良いのよ」と話した。お母さんには感謝している。だけどやっぱり、「私たちとあなたは違う」という境界線を色濃く感じさせられたような気もする。

当事者の視点に寄り添う、ということは、未来共生プログラムを履修するわたしたちが常に行おうとしてきたことである。だけど、どこか裏切りのような、嘘に固められた態度のような、そんな後ろめたさを覚えた。確かに私は、私立病院の診察代と薬代に10,000円を請求されたとき、そのお金を持っていた。お母さんは、値切り交渉に挑戦してくれたけど、10,000円は、海外旅行の保険会社に請求できる金額であったし、私には、その金額にそれほどの関心が無かった。普段、ポケットのなかに、お肉を食べるお金があるのに皆に合わせてスクマ[4]を食べたり、チョコレートを買うお金があるのに皆と一緒に道端に落ちているサトウキビをかじったりしたのも、何かひどい裏切りをしていたかのような気がする。同じにできる、その範囲は、あくまでも自分に危険の及ばない範囲だけであったからだ。当事者になることはできないし、危険か否かの線引きを自分でするくせに、態度だけは当事者の視点に立とうとすることが、ひどい欺瞞のように感じた。

佐藤（2006）は、「結局、フィールドワーカーというのは、現地の人から見ればよそ者なのです」(46頁）と述べている。質的調査の最前線を走る研究者が、このように言ってしまうなら、もはやどうしようもない気持ちにもなる。確かに、社会学や人類学の質的調査についての本には、それぞれの調査者が、当事者性をめぐる課題や、研究者としての立ち振る舞いについて悩む姿や、その克服について描かれている。それらを読むと、少なくとも、こういう落とし方があるのか、と納得できるが、やはりそれは私の出した答えではないので、本当の意味では腑に落ちてこない。ただ、佐藤は同書で、フィールドワーカーの強みを「岡目八目」[5]という言葉で表している。すなわち、フィールドワーカーは、確かに「よそ者」であるが、それゆえにこそ見えてくるものがあるのではないか、ということである。

私はおそらくこれから何度もフィールドへ行き、「よそ者」でありながらも「当事者に近づこうとする」、その曖昧な立ち位置に自分をおき、そのたびに思い悩まなければならないのだろう。

注

1 ミルクティーのこと。

2 ナンのようなもの。

3 白いトウモロコシの粉からつくる主食。

4 スクマウィキ。一般的な野菜である。

5 他人の囲碁を傍で見ていると、実際に対局しているときよりよく手がよめること。転じて、第三者には、物事の是非、利・不利が当事者以上にわかること（広辞苑第六版より）。

参照文献

佐藤郁哉
2006『フィールドワーク増訂版――書を持って街へ出よう』東京：新曜社。